

巽八景

常磐津

全詞章

常磐津

立川焉馬 述

作曲者・初演年不詳

大江戸おほえどとならぬ往昔むかしの武蔵野むさしのの、尾花おはなや招まねき寄よせたりし

張はりと意気地いきぢの深川ふかがはや、因縁いんねんも長ながき永代えいたいの、帰帆きはんも粹いきな送り船おくぶね

その爪弾つまびきの絃いとによる、情緒じやうしよに身みさへ入相いりあひの、後朝きぬぎぬならぬ山鐘やまかねも

ごんと佃つくだの辻占つじうらに、燃もゆる焰ほのほの篝火かがりびや

せめて怨うらみて玉章たまづさを、薄墨うすずみに書かく雁かりの文字もじ

女子をなごの念ねんも通とほし矢やの、届とどいて今いまは張弱はりよわく

いつか二人ふたりが仲町なかつちやうに、しつぽり濡ぬるる夜よの雨あめ

堅かたい石場いしばの約束やくそくに、話はなしは積つもる雪ゆきの肌はだ

解とけて嬉うれしき胸むねの雲くも、吹ふ払はらふたる晴嵐せいらんは

辛気新地しんきしんちぢやないかいな

洲崎すさきの浦うらの浪越なみこさじと、盟ちかひしことも有明ありあけの

月つきの桂かつらの男気をとこぎは、定めかねたる秋あきの空そら

誑たぶらされたさの真実しんじつに、見下みおろされたる櫓下やぐらした

疑念晴ぎねんはらし夕化粧ゆふげしやう、目元めもとに照てらす紅べにの花はな

幾世契いくよちぎらん諸白髪もろしらが

浮名うきな巽なつみの八景はつけいと、その一節ひとふしを立川たてかはの、流れを筆ふでに残のこしける